# 近現代共通語における逆接確定節
## ―運用法の変化を促すもの―

矢　島　正　浩

### 1．はじめに

現代日本語における逆接の確定辞は、ガとケレド（「けれども・けれど・けども・けど」などを含む）がその代表的な形式である。現代日本で広く共有される共通語においてガとケレドは用法上の差は小さく、「「が」は書き言葉に多用され、「けれども」は話し言葉で愛用される」（森田 2007:312）など、文体的な役割分担のもとで共存するとされている。

ところで、宮内（2007）は、「江戸後期から明治期」にかけてケレドが伸長し、「使用率・敬体・機能の３つの面」において大きな変化を生じることを指摘する。上に引くガとケレドの文体的分担は、近代以降のケレドの用法拡張を経つつ次第に形成されていくものと想定される。新興の形式が話し言葉で伸長し、旧来の形式が書き言葉性を帯びていくことは言語変化のあり方として珍しいことではない。ガとケレドもその一類型として、とりあえずは位置づけられるものであろう。しかし、ガは確かに「書き言葉に多用」される状況は示しつつも、後述するように音声言語の一部資料では依然として根強い使用があり、「話し言葉」では衰退すると一括できるような、単純な歴史を描かない。

本稿は、ガの「書き言葉」性の解釈範囲を安易に広げる前に、ガ・ケレドには、他の接続辞にはない固有の共存原理が働いているのではないか、という見方に立って、両語形の用法を観察してみたい。その上で、なぜその実情に至ったのかについて検討する。

### 2．調査対象資料

#### 2.1. 資料及び調査範囲

本稿の調査では、近代及び現代日本語の共通語を多角的に観察する目的から、以下に示すコーパス類を中心に使用した。

＊近代：『日本語歴史コーパス　明治・大正編』
・当コーパスは３つのサブコーパスから成るが、それぞれ「明治初期口語資料」（以下、「初期口語」）、「雑誌」、「国定教科書」（以下「教科書」）とジャンル名で示す。
※以上は国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス』（データバージョン 2019.3, 中納言 2.4.4。以下 CHJ とする）を使用。「初期口語」のみ非コア、「洒落本・雑誌・教科

書」はコアデータを検索対象とする。

※ CHJ の利用においては、本文種別「引用」「その他」は性格付けが困難との理由より対象から外す。文体は「口語」に限定し、「文語」「漢文」「韻文」等は対象外とする。

＊近代:SP 盤落語資料[1]。金澤（2015）記載の東京落語 76 話（1903-13 年）を目視で調査。「枕」など噺家から客に向けて語る部分は「地」とし、「会話」と区別する。

＊現代：

『日本語話し言葉コーパス』（データバージョン 2018.01、中納言 2.4.2。以下、CSJ）

※コアデータのみを対象とし、学会講演（独話）、模擬講演（独話）、再朗読（独話）、学会講演インタビュー（対話）、模擬講演インタビュー（対話）、課題指向対話と区別して示す。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（データバージョン 1.1、中納言 2.4。以下、BCCWJ）

※コアデータとして分析されるレジスターを対象とする。ただし、そのうちの「書籍」は内容分野によって「文学」（書籍 2 と記す）とそれ以外（「総記・哲学・歴史・社会科学・自然科学・技術工学・産業・芸術・言語」。書籍 1 と記す）とで大きく二分して扱う。前者の書籍 2 には会話等の引用により話し言葉的要素が多く含まれると見ることによる[2]。

『名大会話コーパス』（データバージョン 2018.02、中納言 2.4.2。以下、NUCC）

CHJ 収載の近代語資料には、当時の書き言葉あるいは話し言葉に対する標準性がうかがえる。「明治初期口語資料」は、「後に進展する非文芸ジャンルの資料における口語体書き言葉の発端・源流として注目すべき資料」（近藤 2019）を選定しており、「雑誌」と合わせることで、当時の書き言葉を広く一望することができる。また「国定教科書」には、当時の書き言葉及び話し言葉において目指された標準語意識が反映されよう。

現代語関連のコーパスでは、BCCWJ が「現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパス」（「概要」より）であり、CSJ が「まとまった内容をもつ」「全国共通語の」「独話（モノローグ）音声」（前川 2006「概説」より）であるなど、現代日本語の書き言葉や話し言葉を代表する言語が取り上げられている。そこでは、現代日本語における共通語的な性格を前提とした上でのバリエーションの観察が可能と考えら

---

[1] 本稿で用いた SP 盤落語の音声及びその文字化資料は国立国語研究所のコーパス化事業の一つとして位置付けられ、今後、公開の予定である。

[2] 宮内（2012）で、接続辞を広く取り上げ、BCCWJ の各資料ごとの使用分布の相違について詳細な検討を行っている。書籍を「文学」とそれ以外とで二分する方法の妥当性が、宮内によって明らかにされており、その見解に従うものである。以下、本文で行う各資料の文体的特徴の押さえ方に関しても、宮内に負うところが大きい。

れる。

それらに加えて、近代東京語で語られる「落語」、及び現代話し言葉の「名大会話コーパス」（NUCC）を取り上げた。本稿で用いる東京落語は、近代東京語の話し言葉史を反映する資料であり、教科書類に描かれる規範性を有した会話とはまた異なった表現が用いられる（矢島 2019）。NUCC も「名古屋近辺で録音されたデータが最も多い」が、「共通語による会話が大半を占めるが、方言も使われている」「親しい者同士の雑談が多い」（『名大会話コーパス』の「概要説明」より）などの特徴を有する談話資料である。いずれも一定程度の共通語資料としての性質を備えつつ、標準性・規範性への意識が他のコーパス資料類に比べるとやや異質である点で特徴的な要素を含む。そういった異なった性質の資料を取り込むことにより、近現代日本語におけるガ・ケレドの用法を広く多面的に考える材料を得る。

上記のうち、コーパスを利用した調査においては、検索キーを以下のとおりとした。

※語彙素読み「ガ／ケレド」AND 品詞 - 中分類 -「助詞 - 接続助詞」[3]

なお、コーパスに収載される各資料のカテゴリーについてであるが、上記のごとく、サブコーパス内の各レジスターを私に立て直しているところがある。そのため、以下、本稿ではそのカテゴリーのことを「ジャンル」と称することとする。

### 2.2. 調査資料の言語的性質の概要

以下の調査において、使用例の多寡について論ずる際の道具立てとして、各資料の有する特徴[4]を押さえておく必要がある。特徴に関与していると思われる 3 つの要素に着

---

[3] この検索方法に拠ると、例えば逆接仮定辞のガ（～ウガ）や、僅少ながら格助詞と判ぜられるガなども含まれる。全データを目視で確認し、このように本稿の課題から外れる例については除外した。また、文頭で用いられる「だが」や「ですけど」など接続詞的用法もカウントされるが、これらは文中で用いられる接続辞類とはまた異なった歴史を描く（矢島 2018 参照）。これら異質の要素を含む諸例についても別扱いが必要と考え、本稿の対象からは外している。

[4] 各資料の特性理解に際しては、コーパスの概要説明等にある記述を参照した。本稿の考察と関連が深い記載の一部を、CSJ を例に、前川（2006）から引いておく。こういった解説類を利用しつつ、本文以下の検討を行っている。

・学会講演：理工学、人文、社会の 3 領域におよぶ種々の学会における研究発表のライブ録音である。（中略）発話スタイルは概してあらたまり度が高い。（p.4）

・模擬講演：具体的な講演内容を決めてタイトルをつけ、1 講演 10~15 分程度のスピーチをおこなった。（中略）発話スタイルは概して学会講演よりもくだけたものとなっている。（p.4）

・再朗読：学会講演ないし模擬講演として収録された音声の転記テキストを同一の話者

目して整理しておきたい。

①. 書記資料か音声資料か
書記資料：CHJ・BCCWJ 収載の資料
音声資料：落語、CSJ・NUCC 収載の資料

②. 表現スタイルが一方向性か双方向性か
表現者（話し手・書き手）は受け手（聞き手・読み手）に対して一方向性の表現を行うのか、双方向性のやり取りを想定するのか。CSJ はそもそもその点を区別したレジスターによって構築されている。NUCC は、「親しいもの同士の雑談」を多く含む点から双方向性を基盤とするコミュニケーションと見てよいであろう。書記資料でも同様の区別が可能で、CHJ のうち、地の文には一方向性の、会話文には基本的に双方向性の表現が見えやすいと捉える。BCCWJ の中の「白書・新聞・書籍 1〈文学以外〉」は、表現者の伝えたいことについて、まとまりをもった文章単位で表現する、即ち一方向性の表現スタイルを基本構造としていよう。
それに対して、「Yahoo! 知恵袋」は web 上で質問したい人、回答したい人を結んで情報共有をはかるサイトであり、「雑誌・書籍 2〈文学〉」には会話の引用が相当量含まれる。その点で、これらにおいては「白書・新聞・書籍 1」と比べて、双方向性の要素を相対的に多く含む資料と位置付けてよいと考える。なお、「ブログ」は性格の異なるものを多く含むので保留とせざるを得ない。が、一応、web 上の言語という共通点から「知恵袋」に準じた扱いで以下進めることで、資料性を考える材料を得ることとする[5]。

③. 規範指向度が強か弱か
例えば、話し言葉で一方向性の特徴を典型的に有する講義体が標準語の形成に深い関わりを持つとされる。書記資料（「白書・新聞」など）だけでなく、音声資料であってもこのように一方向性の表現スタイルを基本とする「独話学会・独話再朗

---

が朗読した音声である。フィラーや言い直しも朗読の対象としている。（p.5）
自発音声の特徴を把握するためには、朗読された音声との比較も必要である。そこで、独話との対照用に、対話と朗読の音声も収録した。（p.5）
・対話音声：対話音声には、「学会講演インタビュー」「模擬講演インタビュー」「課題指向対話」「自由対話」の 4 種類がある。（p.5）
※自発性　低　←→　高（p.11）
再朗読ないし朗読＜＜学会講演＜模擬講演＜＜インタビュー＜課題指向ないし自由対話

[5] ブログの言語について、野田（2016）で「話しことば的／書きことば的という区別だけではとらえきれない問題」について取り上げられている。

読」等では一定以上の規範性が求められると考える。

一方、双方向性の表現スタイルにおいては、受け手との関係性に応じて、規範指向度の強弱に差がある。推敲を経た書記言語では規範指向度は上がり（「教科書・雑誌」など）、推敲の度合いが相対的に低い（ことを装う）音声言語（「落語・対話学会」など）、web 言語（「知恵袋・ブログ」）はそれに次ぎ、自発性の高い音声資料（「対話課題・名大会話」など）は最も規範指向度が低いと考えられる。

言うまでもないことであるが、上記はあくまでも大雑把な特徴付けに過ぎない。例えば、BCCWJ「書籍 1〈文学以外〉」「新聞」にも会話は含まれるし、CHJ や BCCWJ の「雑誌」には文芸ジャンルも含む。さらに話題や場、受け手の位置づけ次第で、同一資料内でも表現スタイル・規範指向度ともに随時変わってくる。そういった細部の相違・正確さは取り措いて、今は、各資料が相対的に特徴とするところを大づかみに押さえておく。その立場から上記①～③[6]の諸要素をジャンル別に押さえ、ざっと図示すると次のようになる（繰り返すが、これらはあくまでも検討を進めていく上での準備としての位置づけである）。

| | 一方向性要素が基本 | 双方向性要素あり |
|---|---|---|
| 近代資料 | 初期口語の「地」<br>教科書の「地」<br>雑誌の「地」<br>落語の「地」 | 初期口語の「会話」<br>教科書の「会話」<br>雑誌の「会話」<br>落語の「会話」 |
| 書記資料（BCCWJ） | 白書<br>新聞<br>書籍1 | 雑誌<br>書籍2<br>知恵袋<br>（ブログ） |
| 音声資料（CSJ・NUCC） | 独話学会<br>独話再朗読<br>独話模擬 | 対話学会<br>対話模擬<br>対話課題<br>名大会話 |
| | 強← 規範指向度 →弱 | 強← 規範指向度 →弱 |

図１　各資料の表現スタイル（仮）

[6] 試みに、規範指向度の強弱については、以下本文の表１～５に示すガ占有率や、敬体選択率、ノ付加傾向なども踏まえて配置してみている。

以下、「一方向性の表現スタイルを基本とする資料」を「一方向性資料」、「双方向の要素を相対的に多く含む資料」を「双方向性資料」と便宜的に称することがある。

### 2.3. ガの書き言葉性？　ケレドの話し言葉性？

最初に、本稿の調査範囲におけるガとケレドの使用概況を示すことによって、先行研究の指摘するガの書き言葉性、ケレドの話し言葉性が、本稿の調査資料でどのように現れるのかを見ておこう。表１では、CHJ 及び落語資料に関しては地と会話とを区別して示している。なお、以下の表中で空欄の箇所は該当例がなかったことを表す。

表１　資料別接続辞使用状況（概要）

| 時代 | コーパス類 | | ジャンル | ガ | ケレド | ガ占有率 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 近代 | CHJ | 地 | 初期口語 | 17 | | 100% |
| | | | 教科書 | 1366 | 31 | 98% |
| | | | 雑誌 | 772 | 56 | 93% |
| | | 会話 | 初期口語 | 693 | 56 | 93% |
| | | | 教科書 | 398 | 39 | 91% |
| | | | 雑誌 | 260 | 48 | 84% |
| | — | 地 | 落語 | 89 | 2 | 98% |
| | | 会話 | 落語 | 270 | 40 | 87% |
| 現代 | BCCWJ | | 白書 | 207 | 1 | 100% |
| | | | 新聞 | 822 | 33 | 96% |
| | | | 書籍1〈文学以外〉 | 604 | 53 | 92% |
| | | | 知恵袋 | 886 | 147 | 86% |
| | | | 雑誌 | 644 | 147 | 81% |
| | | | 書籍2〈文学〉 | 166 | 59 | 74% |
| | | | ブログ | 428 | 215 | 67% |
| | CSJ | | 独話・学会 | 1157 | 633 | 65% |
| | | | 独話・再朗読 | 85 | 63 | 57% |
| | | | 独話・模擬 | 731 | 2048 | 26% |
| | | | 対話・学会 | 29 | 112 | 21% |
| | | | 対話・模擬 | 13 | 116 | 10% |
| | | | 対話・課題 | 4 | 64 | 6% |
| | NUCC | | 名大会話 | 119 | 9286 | 1% |

表１では、コーパス別に、それぞれガ占有率の高い順に資料を並べている。ガのケレドに対する勢力比という観点（ガ占有率）で表１を見ると、以下のことがわかる。

①近代は、書記資料・音声資料を問わず、また会話・地の区別を問わずガが多用されていた。

②現代は、書記資料＞音声資料という傾向差を生じるが、同じ音声資料でも一方向性＞双方向性という表現スタイルの違いでガの占有率が大きく異なる。

現代においては、BCCWJ の白書ではほぼガ、NUCC はほぼケレドというように、これまで指摘されてきたガの書き言葉性、ケレドの話し言葉性が、一まずは確認される。しかし同じ話し言葉資料（音声資料）でも、一方向性の「独話」スタイルにおいてはガの勢力が依然として高い。「書き言葉性」の説明範囲を安易に広げるだけではなく、同

じ音声資料でもケレドの選択へと単純に流れ込んでいかない事情について、以下検討していく。

## 3．敬体への集中

### 3.1. ガ・ケレド節の敬意度

ガ節の書き言葉性、ケレド節の話し言葉性の一面を構成する特徴として、ガ節が敬体によって構成される方法が中心となり、日常語性を失っていく様子について指摘されることがしばしばある（古くは三尾 1942）。そこで、ここでガ・ケレド節の取る述語が常体で用いられるのか、あるいは丁寧語を取り敬体で用いられるのかという点から、使用例を観察しておきたい。

なお、接続辞は表現文中で現れる部位によって、それぞれ i 接続助詞、ii 終助詞的用法を弁別することが可能である。

(1) 申し訳ありませんが[i]、ちょっとそこを退いてほしいんですけど[ii]。　（作例）

便宜的に i のように主要部で前件の述語に下接して用いられる接続辞を［接続助詞］、ii のように後続する節が表現されない終助詞的用法をまとめて［終助詞］とする[7]。

(2) a「…あ、なるほどね、ふーん。」「# ま、でも基本的に公開されてないですけどね、メールアドレスって。」「# ああ、メールアドレスを出してる人もいるわけ。」
（NUCCdata093）…○［終助詞］とする例

b「…フランス語をやってみようと思って。」「# そうそう。」「# で、ひと月やったんだけど。」「# うん。」「# 挫折した。# 調べてみたら、英語で入れることがわかって。　（NUCCdata051）…×［終助詞］としない例

(2a) は対応する主節がコンテクスト中に見出せない。この種のものを、事情の違いは取り措いて、まとめて［終助詞］とする。一方、(2b) のように、対話者のあいづちで一旦さえぎられているだけの例など、コンテクストの前後において、呼応する主節が見出せる例は、［終助詞］とはしない[8]。

---

[7] 本稿の［終助詞］は、ケレド節を文末で用いる用法のうち、白川（2009）が「終助詞的な用法」「倒置的な用法」「挿入的な用法」として「言い尽くし」の用法と認定するものにほぼ該当する。

[8] CSJ には「転記基本単位」によって分割された発話単位の先頭に「#」が付されるが「転記基本単位」は「0.2 秒以上のポーズ（言語音の途切れに相当）に挟まれた音声範囲」（前川 2006:24）であり、［接続助詞］と［終助詞］の弁別のとは直接的には結び付かない。NUCC の「#」も同様である（例 2 参照。2a は # が直後に付されないが［終助詞］とした例であり、2b は付されるが［終助詞］とはしない例である）。そこで一々、使用例

以上の点で区別したガ・ケレドの使用状況を、表２に示す。なお、表２以下も、表１で得たガ占有率の高い順で資料を配置している。

表２　文体別用法別使用状況

| 用法 | コーパス類 | | ジャンル | ガ 常体 | ガ 敬体 | ガ 敬体選択率 | ケレド 常体 | ケレド 敬体 | ケレド 敬体選択率 | ［終助詞］占有率 ガ | ［終助詞］占有率 ケレド |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ［接続助詞］ | CHJ | 地 | 初期口語 | 12 | 5 | 29% | | | — | 0% | — |
| | | | 教科書 | 746 | 620 | 45% | 27 | 4 | 13% | 0% | 0% |
| | | | 雑誌 | 603 | 161 | 21% | 44 | 11 | 20% | 1% | 1% |
| | | 会話 | 初期口語 | 589 | 102 | 15% | 53 | 3 | 5% | 0% | 0% |
| | | | 教科書 | 200 | 164 | 45% | 21 | 9 | 30% | 8% | 13% |
| | | | 雑誌 | 147 | 71 | 33% | 25 | 6 | 19% | 15% | 27% |
| | — | 地 | 落語 | 11 | 68 | 86% | 1 | 1 | 50% | 11% | 0% |
| | | 会話 | 落語 | 134 | 72 | 35% | 32 | 5 | 14% | 23% | 5% |
| | BCCWJ | | 白書 | 189 | 18 | 9% | 1 | | 0% | 0% | 0% |
| | | | 新聞 | 765 | 50 | 6% | 29 | 2 | 6% | 1% | 6% |
| | | | 書籍1〈文学以外〉 | 355 | 233 | 40% | 35 | 9 | 20% | 3% | 10% |
| | | | 知恵袋 | 19 | 761 | 98% | 65 | 30 | 32% | 12% | 34% |
| | | | 雑誌 | 439 | 182 | 29% | 113 | 9 | 7% | 3% | 15% |
| | | | 書籍2〈文学〉 | 144 | 11 | 7% | 37 | 2 | 5% | 6% | 29% |
| | | | ブログ | 104 | 264 | 72% | 117 | 21 | 15% | 14% | 35% |
| | CSJ | | 独話・学会 | 17 | 1138 | 99% | 29 | 599 | 95% | 0% | 1% |
| | | | 独話・再朗読 | 2 | 83 | 98% | 1 | 62 | 98% | 0% | 0% |
| | | | 独話・模擬 | 3 | 728 | 100% | 141 | 1896 | 93% | 0% | 1% |
| | | | 対話・学会 | | 29 | 100% | 19 | 81 | 81% | 0% | 11% |
| | | | 対話・模擬 | | 13 | 100% | 18 | 81 | 82% | 0% | 15% |
| | | | 対話・課題 | | 4 | 100% | 11 | 47 | 81% | 0% | 9% |
| | NUCC | | 名大会話 | 19 | 43 | 69% | 4941 | 639 | 11% | 45% | 38% |
| ［終助詞］ | CHJ | 地 | 雑誌 | 4 | 4 | 50% | 1 | | 0% | | |
| | | 会話 | 初期口語 | | 2 | 100% | | | — | | |
| | | | 教科書 | 16 | 18 | 53% | 8 | 1 | 11% | | |
| | | | 雑誌 | 21 | 21 | 50% | 14 | 3 | 18% | | |
| | — | 地 | 落語 | | 10 | 100% | | | — | | |
| | | 会話 | 落語 | 26 | 38 | 59% | 1 | 2 | 67% | | |
| | BCCWJ | | 新聞 | 4 | 3 | 43% | 2 | | 0% | | |
| | | | 書籍1〈文学以外〉 | 2 | 14 | 88% | 3 | 6 | 67% | | |
| | | | 知恵袋 | 2 | 104 | 98% | 23 | 29 | 56% | | |
| | | | 雑誌 | 4 | 19 | 83% | 13 | 12 | 48% | | |
| | | | 書籍2〈文学〉 | 10 | 1 | 9% | 16 | 4 | 20% | | |
| | | | ブログ | 8 | 52 | 87% | 42 | 35 | 45% | | |
| | CSJ | | 独話・学会 | 2 | | 0% | 2 | 3 | 60% | | |
| | | | 独話・模擬 | | | — | 11 | | 0% | | |
| | | | 対話・学会 | | | — | 5 | 7 | 58% | | |
| | | | 対話・模擬 | | | — | 6 | 11 | 65% | | |
| | | | 対話・課題 | | | — | 5 | 1 | 17% | | |
| | NUCC | | 名大会話 | 11 | 46 | 81% | 3082 | 624 | 17% | | |

※［終助詞］占有率は、以下の計算により、各資料別に求めている。

［終助詞］占有率＝［終助詞］／（［接続助詞］＋［終助詞］）×100%

まず、ガ・ケレド節の敬意度を見る前に、［終助詞］用法の使用状況について確認しておこう。表中の［終助詞］占有率によると、［終助詞］は資料による差があり、近代と現代とを比べても特に単純な増加または減少の関係では捉えられない。近代ではガ、

に立ち返って確認を行う方法を取ったが、特にNUCCは１文の単位を見定めがたい場合も少なくなく、十分に精密な区別に至っていない可能性を残している。

現代ではケレドが、それぞれ［終助詞］として用いられる頻度が高いとは言えそうである。さらに現代ではガ・ケレドいずれも書記資料・音声資料の双方向性資料において多用傾向が認められる。［終助詞］の機能が、受け手の受容に働きかけるものであることがうかがえる[9]。

その点を押さえた上で、［接続助詞］の用法から順次見ていく。まず、全資料でガ＞ケレドと、ガの方が敬体選択率は高い。ただし近代資料では、落語を除き、地のみならず会話でも敬体選択率がそもそも低く、なおかつガとケレドの差がさほど大きくない。落語の地は、噺家が直接に客に語りかける部分であり、事情が特殊であることから一旦取り措けば、近代は、現代ほど、ガ・ケレドを使用することと常体・敬体の文体を選択することとにおいて、明瞭な関係はなかった可能性がある。現代においては、ガは、特に書記資料のうちの双方向性資料（中でも知恵袋・ブログの web 言語）及び音声資料で軒並み高い敬体選択率を示す。ケレドは書記資料では低めで、音声資料のうち CSJ で高いものの NUCC では低く、傾向を捉えにくい。

［終助詞］の方では、ガは使用の多かった近代資料では必ずしも敬体選択率は高くなく、現代の書記資料では、高頻度で敬体を取る。規範指向度が＜弱＞の名大会話でも高い比率を示しており、基本的に、現代になるにつれて、資料の違いを超えて敬体での使用を好む傾向を強めていると捉えられそうである。対するケレドは書記資料・音声資料であまり顕著な差を示さず、両資料とも敬体選択率は一定の割合に止まっている。

［接続助詞］［終助詞］ともに、近代から現代にかけてのガとケレドの用法分岐ということに関わっては、ガ節が丁寧体による従属節の構成傾向を強めると捉えられるのに対して、ケレド節はジャンルによる差が大きく、その視点からは明確な方向性がうかがえないといった相違でひとまずは押さえられそうである。

### 3.2. 主節の文体との関係

前節では、ガ・ケレド節において受け手への敬意が表される傾向推移を見た。ただ、従属節はその文体選択に際して、主節がいかなる文体かということに大きな影響を受ける。特にガ節の敬意度の高さは表現文全体の基調にあわせたものなのか、従属節で自立的に起こる面を含むのか、確認が要る。そこで、本節では、主節が敬体の場合、常体の場合とで、従属節の丁寧体を取る比率がどう違うのかという観点から検討したい。それぞれを区別した結果を表 3 に示す。

なお［終助詞］の用法についてであるが、同用法は主節が表現されず、ここで問おうとすることの検証には不向きなので除外して考えることにする。

---

[9] 白川（2009）は、本稿でいう［終助詞］用法の「ケド節」が「聞き手に対する「参照情報の提示」」を行うことを明らかにしている。

表3　主節の文体と従属節の文体（［終助詞］を除く）

| コーパス類 | | ジャンル | 主節が［常体］ガ 常体 | 敬体 | 敬体選択率 | 主節が［常体］ケレド 常体 | 敬体 | 敬体選択率 | 主節が［敬体］ガ 常体 | 敬体 | 敬体選択率 | 主節が［敬体］ケレド 常体 | 敬体 | 敬体選択率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| CHJ | 地 | 初期口語 | 12 | | 0% | | | — | | 5 | 100% | | | — |
| | | 教科書 | 731 | | 0% | 20 | | 0% | 15 | 620 | 98% | 7 | 4 | 36% |
| | | 雑誌 | 590 | 3 | 1% | 43 | | 0% | 13 | 158 | 92% | 1 | 11 | 92% |
| | 会話 | 初期口語 | 582 | 10 | 2% | 51 | | 0% | 7 | 92 | 93% | 2 | 3 | 60% |
| | | 教科書 | 184 | | 0% | 18 | | 0% | 16 | 164 | 91% | 3 | 9 | 75% |
| | | 雑誌 | 137 | 4 | 3% | 20 | 2 | 9% | 10 | 67 | 87% | 5 | 4 | 44% |
| — | 地 | 落語 | 6 | 11 | 65% | 1 | 1 | 50% | 5 | 57 | 92% | | | — |
| | 会話 | 落語 | 128 | 21 | 14% | 31 | 2 | 6% | 6 | 51 | 89% | 1 | 3 | 75% |
| BCCWJ | | 白書 | 189 | | 0% | 1 | | 0% | | 18 | 100% | | | — |
| | | 新聞 | 764 | 13 | 2% | 24 | | 0% | 1 | 37 | 97% | 5 | 2 | 29% |
| | | 書籍1（文学以外） | 353 | 6 | 2% | 30 | 1 | 3% | 2 | 227 | 99% | 5 | 8 | 62% |
| | | 知恵袋 | 14 | 31 | 69% | 33 | 5 | 13% | 5 | 730 | 99% | 32 | 25 | 44% |
| | | 雑誌 | 437 | 59 | 12% | 105 | 3 | 3% | 2 | 123 | 98% | 8 | 6 | 43% |
| | | 書籍2（文学） | 143 | 1 | 1% | 35 | | 0% | 1 | 10 | 91% | 2 | 2 | 50% |
| | | ブログ | 102 | 48 | 32% | 97 | 5 | 5% | 2 | 216 | 99% | 20 | 16 | 44% |
| CSJ | | 独話・学会 | 13 | 5 | 28% | 19 | 5 | 21% | 4 | 1133 | 100% | 10 | 594 | 98% |
| | | 独話・再朗読 | | | — | 1 | | 0% | 2 | 83 | 98% | | 62 | 100% |
| | | 独話・模擬 | 1 | 1 | 50% | 80 | 1 | 1% | 2 | 727 | 100% | 61 | 1895 | 97% |
| | | 対話・学会 | | 1 | 100% | 14 | 8 | 36% | | 28 | 100% | 5 | 73 | 94% |
| | | 対話・模擬 | | | — | 16 | 18 | 53% | | 13 | 100% | 2 | 63 | 97% |
| | | 対話・課題 | | 1 | 100% | 5 | 13 | 72% | | 3 | 100% | 6 | 34 | 85% |
| NUCC | | 名大会話 | 19 | 18 | 49% | 4817 | 265 | 5% | | 25 | 100% | 124 | 374 | 75% |
| 総計 | | | 4405 | 233 | 5% | 5461 | 329 | 6% | 93 | 4587 | 98% | 299 | 3188 | 91% |

最初に表3のうち、主節が［常体］の場合についてである。主節が常体の場合には、ガ節も常体である例が多数派である。

(3) a 結局、電気は大丈夫だったが電話が不通になった。パソコンは使えるが、来るはずのファクシミリが来ない。　(BCCWJ 雑誌 PM41_00230)

b「あの、こないだねー、丸善行ったんで、ミスチルのね、歌詞がいっぱいねー、載ったねー、はがき見た。」「うんうんうん」「１５０円もしたからねー、F106 買おうかと一瞬思ったがやめた。」「たっかいよ。」　(NUCC data104)

主節・従属節ともに常体でガを用いる方法は、現代資料においては、(3a) のように書き言葉中で、特定の受け手とのやり取りを想定しない、一方向性のスタイルが典型と言える。(3b) はわずかながら音声資料中に見出せた例の１つである。中学生の同級生同士の 10 代前半女性の会話であり、呼応する主節も１文節と短く、従属節とあわせて一続きの表現となっている。話題の内容、受け手との関係性も含めた条件がそろった限られたケースにおいて、こうして話し言葉中でもガ節も常体を取り得るようである。

次に、主節が常体で、ガ節が敬体を取る例についてである。BCCWJ の双方向性資料（知恵袋・ブログ）、NUCC 及び CSJ のうちの一部資料で、高い敬体率を示す。

(4) a 店長初め主だったメンバーから謝罪を受けましたが、思わず大笑いしてしまった…　(BCCWJ 知恵袋 OC06_02964)

b「…ま、気は楽で行ったんですけど、遊びみたいな、半分は遊びみたいな気持ちで行ったんですが、暑い。」「うん、うん」「うん、うん」「でもすっごくあの、食べ物がおいしくって、…」　(NUCCdata108)

(4a) のガ節を常体に変更すると「…謝罪を受けたが、思わず大笑いしてしまった」となり、原文の持つ双方向性の特性が失われ、一方向性を有する典型的な書き言葉として読める。ガ節における対人的要素がなくなることにより、ガ節は主節と同一基調の文体内で主節に対する従属的な構成要素としての性質を強めることが関わっているものと考えられる。(4b) を常体に改めた「…行ったんだが、暑い」の方は、日常的な双方向性の会話のままのやり取りとしては、現代共通語では違和感が大きく、ほぼ使用は不可能と思われる。表 3 の調査結果には、現代語では、双方向性のやり取りを意図する表現では、ガ節は主節の基調に関わらず敬体を必要とする段階にあることが現れているものと見る。

今度は、もう一方のケレドについてである。最初に主節、ケレド節ともに常体の例を見ておく。

(5) a …技もいろいろあるけど、前田日明がよかったね。引退しちゃって残念だったけど、彼には華があった。前田がつくったリングス、クマちゃんが…

(BCCWJ 雑誌 PM11_00002)

b「一時間も歩くのはごめんだけど、そんなにないわよね？さっき車で曲った辺りよね？」 (BCCWJ 書籍 2〈文学〉PB29_00003)

(5a) は雑誌中の記述で、不特定の読み手に対して一方向性スタイルの表現中の例であり、(5b) は文芸作品中で、特定の相手とのやり取りとして双方向性スタイルで用いる表現中の例である。ここにあげた資料の他、NUCC の名大会話でも抜群の使用数を示す。やわらかい文体の書き言葉としても、ごく一般的な日常会話としても多用される方法である。

注意が要るのは、主節が常体で、ケレド節では敬体を取る場合もあることである。ケレドでも、数値は低めながら、ガと同様に、やはり CSJ の双方向性資料（対話・学会 / 模擬 / 課題）で敬体選択傾向が強い。NUCC は、敬体選択率については低率にとどまり、ガ節ほどの頻度では用いていない。

(6) a「ああー、扇風機はいりますね。」「買ったんですけどねえ、それも勝てなかった。いや、もう本当に。扇風機でもだめだったなあ、今年。」 (NUCC data63)

b いつも思うんですけど、知恵袋やってる人ってお金持ちが多いの？

(BCCWJ 知恵袋 OC14_03066)

c あのーそもそもがそういう何かこう都市部で多分こういにいな田舎とか言っちゃいけないんですけど、まー地方の方とはあのー違うだろうっていう。そのー何だろうこう希薄化してるとかあの人間関係が単純に知ってるか知らないかとか親しいかそうじゃないかみたいな単純になってるんじゃないかっていうことと、そのーそれに伴ってそのー言語活動って言うか何か反応その人に接してどういう言葉を発するかっていうようなそういうことも単純にあのなってきてるんじゃないかって… (CSJ 対話・学会 D04F0050-R)

常体が基調の表現文中で、あえてケレド節が敬体を用いることで、何らかの表現意図が伝わりやすくなる。この場合のケレド節は、後続の主節で示す事態や見解に対して、内容的に食い違いを有する動作（6a）、あるいは注釈的な発話態度の介入（6b）など、なんらか意味で不連続性を有する。（6c）も言い切ることが躊躇われ、滞りを認識する事態を承ける。この不連続や滞りによる緊張の緩和が、逆接確定節での敬体使用に結び付いている可能性がある（この点は 5.2 で再論）。

ただし、そのような意味合いの付加は選択可能なものであり、いずれの例文も、ケレド節の敬体を常体に改めても違和感は生じない（6a´「買ったんだけど、それも勝てなかった」、6b´「いつも思うんだけど、…多いの？」、6c´「…とか言っちゃいけないんだけど、…違うだろうっていう」）。敬体のガ節は敬体を選択することがほぼ不可避的な条件下で用いられていた（例 4 参照）のに対して、敬体のケレド節は、常体・敬体のいずれも選択可能な条件下で、受け手に対する表現のしかたをコントロールするオプションとして用いられている。

以上のごとく、主節が常体の例の観察によって、双方向性のコミュニケーションにおいては、ガ節が敬体必須性に向かい、ケレド節が敬体選択の任意性の中で運用されている様子がそれぞれ確認される。

次いで表 3 中の、主節の文体が敬体である場合についてである。まずガであるが、調査範囲内の資料では軒並みほぼ 100% の頻度で敬体を取る。表 2 で見たガ節の敬体率の高さは、つまり主節も敬体であることと一体となって起きているということである。言い換えれば、基本的にガ節の敬体指向は、主節も含めた表現文全体の基調とともにある（平たく言えば、丁寧な改まった口調ではガ節が好まれる）ということを押さえておくべきであろう。

ケレドは様子が異なる。まず BCCWJ では主節が敬体であってもケレド節では敬体を取らない傾向が認められるのに対して、CSJ 及び NUCC ではむしろそれよりは高い率で敬体を取る。特定の受け手を想定しない書記資料ではケレド節は主節に合わせたモード選択をしない場合があるということになる。

(7) 星を見る連中のクルマはミニバンが多いんだけど、ラシーンで行くとみんな覚えていてくれ駐車スペースを開けていてくれます。　（BCCWJ 雑誌 PM45_00132）

なお近代の資料は、まずガ・ケレド節ともに敬体 vs. 常体に特別な偏りを示さなかった（前節参照）。さらに表 3 で明らかなように、大雑把には、主節が常体であれば従属節も常体、敬体であれば敬体か常体と、主節と同じかそれ以下の丁寧度の文体をとる傾向がはっきりしている（落語の一部結果を除く）。対する現代の諸資料は、ガ節は、書記資料で同様の傾向を継続する他は、音声資料全般、さらに書記資料のうちでも双方向性資料といった、対人的な要素を含むコミュニケーションにおいては、主節の文体に関

わらず敬体を取るという原則を強めていた。一方のケレド節は、相対的にその制約からはフリーであり、敬体の選択はオプションとしてあると捉えられる。従属節の文体を丁寧語によって調整する方略がガの方で強く求められるということである。

## 4.「の」を取る述語の多用傾向

### 4.1. 述語でノを取ることの意味

前節でガの広い範囲で敬体を取る傾向を強める様子と、ケレドが必ずしもその観点では同様の傾向が見出しがたい様子にあることを見た。敬体は、いわば受け手の受容を意識した際に選択される文体スタイルである。ここで、受け手の受容との関わりが深い形式として、「多いんだけど」(例7)のように準体助詞ノを取るものを取り上げ、別角度から観察してみる。

まず、ノを取る例の中には、いわゆるスコープのノダとして機能するものがある。

(8) 7年前カードローンを二百万ほど作り、督促で親にバレて、[親がほぼ全額肩代わりしてくれた] のですが、その後、今から4年ほど前に母親に「…」と言われました。 (BCCWJ 知恵袋 OC03_00375)

ガ節は取り立て助詞「は」を含まず「が」をとり、ノは[ ]の範囲を名詞化している。この場合はノの付加は統語的な要請に基づくものであって必須と言え、特段、受け手のことを意識して用いる表現というわけではない。

その一方で、ノの付加が任意と思われる例もある。次に、実際にはノが付加されている使用例と、それを除いた例とを並べている。

(9) a 何でこんな変なところを買ってしまったんだろうって一瞬思ったんですけど、ただそれがんーすんー住み出したらとても住み易いところで、…
(CSJ 独話・模擬 S03F1577 女)

b 何でこんな変なところを買ってしまったんだろうって一瞬思いましたけど、ただ、それが住み出したらとても住み易いところで… (作例)

(10) a まず最初にえ電話でお忘れですかという形でお知らせをするんですが、それでも繋がらない場合はあえーお手紙でそれでもお連絡がない場合…
(CSJ 独話・模擬 S00M0221 男)

b …という形でお知らせをしますが、それでも繋がらない場合はお手紙で…
(作例)

これらはスコープの「のだ」に対して、ムードの「のだ」とされるものである。これらのノは「事実と照合する」機能を担い、従属節で承ける事態が話者にとって既定的であることを表す[10]。着脱可能なノをあえて用いることは、その事態を、受け手に対して

[10] 文末で用いられるノダの既定性についてはさまざまに論じられており、例えば、日本

既定的な事態として伝える方法を選択した意志表示となる。(9a)(10a)のように受け手が未知の事態を述べる際には、ノの付加によって、話し手にとっての確定事態を、結果的に受け手に説明する意図が加わる。ノを除いても表現が可能であり(9b・10b)、その場合は、事態を受け手と関わることなくただ事態として申し述べることとなる。

また、従属節では受け手にとっても既知の事態を取る場合もある。その場合は、受け手と、その確定事態を確認する意味あいを生じる。

(11) a「でも、瀬戸内のお生まれじゃないんですか。」「瀬戸内なんですけれど、やっぱり北海道の味ってのは、また違いますよね。」 (NUCC data024)

b「瀬戸内ですけど、やっぱり北海道の味ってのは、また違いますよね」(作例)

次は、ガ節の事態が、受け手にとって既知とも未知ともいずれとも取れる例である。

(12) a 地方の方言集はかなりたくさんに世に公にせられているのだが、今までこういった目的に利用せられることが少なかった。

(BCCWJ 書籍 1〈文学以外〉PB48_00016)

b 地方の方言集はかなりたくさんに世に公にせられているが、今までこういった目的に利用せられることが少なかった。 (作例)

このように(表現者の実際の真意がどうだったかはともかく)、受け手にとって既知未知のいずれとも決しかねる情報でもノの付加は可能で、その場合のノダは、受け手の受容を目的とした説明の意味合いを帯びる。

このように、ノを付しても付さなくても成り立つ文においては、ノを付した場合は、受け手の受容に関連付けた表現となる。逆にノを付さなければ、(11b)(12b)のごとく、受け手にどういう事態として伝えるかの意識と関わることなく、ただ事態として提示することになる。

ここでは受け手の受容への関連付けの有無とノの着脱とが関わっていることに注意したい。しかもそこではノの着脱は任意である[11]。とするとノを介する形式を取る頻度の

---

語記述文法研究会編(2003:195)は、主節末ノダ(スコープのノダを除く)には、「話し手が認識していたことを聞き手に提示して認識させ」る対人的ムードを担うものと、「話し手自身が認識していなかったことを把握したときに用いられる」対事的ムードを担うものとがあるという形で指摘されている。主節末ノダの既定性が従属節末でも並行的に認められることを、矢島(2017)で議論している。参照されたい。

[11] スコープのノの必須性に限らず、ムードのノについても常に着脱可能というわけではなく、ノの付加・非付加が不自然となる場合もある。野田(1997)は、次の例を「聞き手も当然知っているとみなされる場合」ゆえに「「が」が自然」とする例である。

例、「北沢くんでしたね。きみとはゆっくり話す機会もありませんでしたが、直巳に、いい思い出をもたせてやっていただきました。…」(野田 1997:172 の例 14)

確かにガが自然な表現であるが、「機会がなかったこと」を確認しながら「…なかった

推移には、ノの単純な発達史のみならず、ノを添えた言い方の語用論史が現れると見るべきである。そこで以下、この観点から、現代語において使用率を高める敬体の事情を検討することにする。

### 4.2. 受け手の受容に関連付けた表現へ

ここでは、従属節の述語がノを介さずに［ガ・ケレド］を取るのか、［ノ＋［ダ／デス］＋ガ・ケレド］を取るのかという頻度を問う。観察にあたり、それぞれ主節が常体なのか（表4）、敬体なのか（表5）を分けて示す。主節を問えない［終助詞］の用法についてはここでも検討の対象から外しておく[12]。各資料ごとに、ノを介する形式を取る頻度をノダ及びノデスのぞれぞれの占有率で示している（ノダには「のである・のだった・

表4　主節が［常体］の場合の逆接確定節

| | | | ガ | | | | | | ケレド | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 従属節・常体 | | | 従属節・敬体 | | | 従属節・常体 | | | 従属節・敬体 | | |
| コーパス類 | | ジャンル | ～ | ～ノダ類 | ノダ占有率 | ～マス・～デス類 | ～ノデス類 | ノデス占有率 | ～ | ～ノダ類 | ノダ占有率 | ～マス・～デス類 | ～ノデス類 | ノデス占有率 |
| CHJ | 地 | 初期口語 | 12 | | 0% | | | — | | | — | | | — |
| | | 教科書 | 688 | 43 | 6% | | | — | 18 | 2 | 10% | | | — |
| | | 雑誌 | 545 | 45 | 8% | 3 | | 0% | 40 | 3 | 7% | | | — |
| | 会話 | 初期口語 | 547 | 35 | 6% | 10 | | 0% | 50 | 1 | 2% | | | — |
| | | 教科書 | 170 | 14 | 8% | | | — | 16 | 2 | 11% | | | — |
| | | 雑誌 | 124 | 12 | 9% | 4 | | 0% | 17 | 3 | 15% | 2 | | 0% |
| — | 地 | 落語 | 5 | 1 | 17% | 11 | | 0% | 1 | | 0% | 1 | | 0% |
| | 会話 | 落語 | 106 | 22 | 17% | 18 | 3 | 14% | 28 | 3 | 10% | 2 | | 0% |
| BCCWJ | | 白書 | 188 | 1 | 1% | | | — | 1 | | 0% | | | — |
| | | 新聞 | 750 | 14 | 2% | 11 | 2 | 15% | 20 | 4 | 17% | | | — |
| | | 書籍1〈文学以外〉 | 310 | 43 | 12% | 5 | 1 | 17% | 22 | 8 | 27% | 1 | | 0% |
| | | 知恵袋 | 13 | 1 | 7% | 16 | 15 | 48% | 29 | 4 | 12% | 2 | 3 | 60% |
| | | 雑誌 | 407 | 30 | 7% | 42 | 17 | 29% | 80 | 25 | 24% | 3 | | 0% |
| | | 書籍2〈文学〉 | 130 | 13 | 9% | 1 | | 0% | 29 | 6 | 17% | | | — |
| | | ブログ | 84 | 18 | 18% | 31 | 17 | 35% | 78 | 19 | 20% | 1 | 4 | 80% |
| CSJ | | 独話・学会 | 12 | 1 | 8% | 2 | 3 | 60% | 13 | 6 | 32% | 2 | 3 | 60% |
| | | 独話・再朗読 | | | — | | | — | | 1 | 100% | | | — |
| | | 独話・模擬 | 1 | | 0% | | 1 | 100% | 30 | 50 | 63% | | 1 | 100% |
| | | 対話・学会 | | | — | 1 | | 0% | 8 | 6 | 43% | 2 | 6 | 75% |
| | | 対話・模擬 | | | — | | | — | 3 | 13 | 81% | | 18 | 100% |
| | | 対話・課題 | | | — | | 1 | 100% | 4 | 1 | 20% | 1 | 12 | 92% |
| NUCC | | 名大会話 | 18 | 1 | 5% | 11 | 7 | 39% | 2537 | 2265 | 47% | 57 | 208 | 78% |
| (計) | | | 4110 | 294 | 7% | 166 | 67 | 29% | 3024 | 2422 | 44% | 74 | 255 | 78% |

んですが」を用いることが、真に不自然かどうか、微妙なところを残すように思われる。受け手がその事態を知っているか否か自体、解釈次第のところがあり、実際の使用例につくと弁別が困難な場合が多い。以下、本文の分析は、そのあたりの正確な判別はとりあえず不問として行うものである。

[12] ［終助詞］の用法におけるノの付加傾向も求めてみたが、［接続助詞］ほど顕著ではないものの、ケレドが敬体でノを多用する傾向は同様に認められる。議論の重複・煩瑣を避け、取り上げない。

のでない」等、ノデスには「のでございます・のでした」等の諸形式の一切を含む)。

表4は、主節が［常体］の場合についてである。まず確認しておきたいのが、現代資料ではガとケレドでは、ほぼすべての資料においてケレドの方がノダ占有率も、ノデス占有率も高いことである。つまり、従属節でノを介する、受け手の受容に関連付けた形式を取りやすいのは、常体・敬体を問わずケレドの方だということである。この点で、表3で見た、従属節で敬体を取る方略がガ＞ケレドであったことと好対照をなす。

近代と現代とでは、大雑把に言って、ノを介する言い方は近代資料で低く、なおかつ従属節の常体・敬体の間で差がない（むしろやや敬体での頻度が低い)。対する現代資料は常体を取るガだけは低率のままであるが、敬体を取るガ及び常体・敬体を取るケレドとも、(特に音声資料で）高頻度でノを取るようになっている。従属節におけるノと敬体使用との関係を生じたのは現代に入ってからということになる。

なお、「(計)」欄の数値から、ガ・ケレドのそれぞれにおいて敬体でノを高頻度で取る点は同じであるが､その傾向は特にケレドで明瞭である点で相違があることがわかる。つまり、主節が常体であっても、従属節でノを介する形式を取る際には、特にケレド節の敬体によって行われるということである。これは、丁寧度に関する文体のモードを主節・従属節間で統一することに優先する事情が、逆接確定節においては、そして特にガ節よりもケレド節で働いていることを意味する。

次いで、主節が敬体の例を見る。

表5　主節が［敬体］の場合の逆接確定節

| | | | ガ | | | | | | ケレド | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 従属節・常体 | | | 従属節・敬体 | | | 従属節・常体 | | | 従属節・敬体 | | |
| コーパス類 | | ジャンル | ～ | ～ノダ類 | ノダ占有率 | ～マス・～デス類 | ～ノデス類 | ノデス占有率 | ～ | ～ノダ類 | ノダ占有率 | ～マス・～デス類 | ～ノデス類 | ノデス占有率 |
| CHJ | 地 | 初期口語 | | | — | 5 | | 0% | | | — | | | — |
| | | 教科書 | 15 | | 0% | 583 | 37 | 6% | 7 | | 0% | 3 | 1 | 25% |
| | | 雑誌 | 13 | | 0% | 149 | 9 | 6% | 1 | | 0% | 11 | | 0% |
| | 会話 | 初期口語 | 7 | | 0% | 91 | 1 | 1% | 2 | | 0% | 3 | | 0% |
| | | 教科書 | 16 | | 0% | 146 | 18 | 11% | 2 | 1 | 33% | 6 | 3 | 33% |
| | | 雑誌 | 10 | | 0% | 53 | 14 | 21% | 5 | | 0% | 1 | 3 | 75% |
| — | 地 | 落語 | 5 | | 0% | 53 | 4 | 7% | | | — | | | — |
| | 会話 | 落語 | 6 | | 0% | 44 | 7 | 14% | 1 | | 0% | 3 | | 0% |
| BCCWJ | | 白書 | | | — | 18 | | 0% | | | — | | | — |
| | | 新聞 | 1 | | 0% | 29 | 8 | 22% | 3 | 2 | 40% | 2 | | 0% |
| | | 書籍1〈文学以外〉 | 2 | | 0% | 176 | 51 | 22% | 4 | 1 | 20% | 6 | 2 | 25% |
| | | 知恵袋 | 3 | 2 | 40% | 434 | 296 | 41% | 28 | 4 | 13% | 11 | 14 | 56% |
| | | 雑誌 | 1 | 1 | 50% | 94 | 29 | 24% | 6 | 2 | 25% | 2 | 4 | 67% |
| | | 書籍2〈文学〉 | 1 | | 0% | 9 | 1 | 10% | 2 | | 0% | | 2 | 100% |
| | | ブログ | 2 | | 0% | 164 | 52 | 24% | 14 | 6 | 30% | 10 | 6 | 38% |
| CSJ | | 独話・学会 | 4 | | 0% | 697 | 436 | 38% | 6 | 4 | 40% | 275 | 319 | 54% |
| | | 独話・再朗読 | 2 | | 0% | 53 | 30 | 36% | | | — | 16 | 46 | 74% |
| | | 独話・模擬 | 2 | | 0% | 199 | 528 | 73% | 36 | 25 | 41% | 394 | 1501 | 79% |
| | | 対話・学会 | | | — | 6 | 22 | 79% | 3 | 2 | 40% | 16 | 57 | 78% |
| | | 対話・模擬 | | | — | 1 | 12 | 92% | | 2 | 100% | 23 | 40 | 63% |
| | | 対話・課題 | | | — | | 3 | 100% | 5 | 1 | 17% | 10 | 24 | 71% |
| NUCC | | 名大会話 | | | — | 17 | 7 | 29% | 92 | 31 | 25% | 82 | 292 | 78% |
| (計) | | | 90 | 3 | 3% | 3021 | 1565 | 34% | 217 | 81 | 27% | 874 | 2314 | 73% |

表５の「(計)」の欄の比較から、やはり主節が敬体の場合も、従属節でノを介する傾向は、敬体＞常体であり、かつその傾向はケレド＞ガにおいて明瞭であることがわかる。表４と表５を比べると細かな違いはあるが、大きくはよく似た用例分布を示している。主節が常体の場合と敬体の場合とで、ガ・ケレドのいずれにおいても、ノを取る頻度も、またそれが敬体の従属節であろうとする傾向性も、あまり差がない。つまり、従属節でノを取る、及びそれを敬体で行おうとする方略は、主節の敬意のモードとは無関係に、従属節で独自に行っているということである。

## ５．起こっていること

### 5.1. ガとケレドの違い

ガとケレドでは、ガ節が敬体を取る点で特徴があり、ケレド節はノを取ることに特徴が見えた。ここに、ガとケレドの現代語における役割の相違が象徴的に現れている。

ガ節の敬体指向は、主節の敬意度と合わせることを基盤としつつも、そうではない場合、すなわち主節が常体の場合にも広がっていたのがポイントであった。一方で依然として書記資料の、特に一方向性資料を中心に常体での使用も継続している。つまりガは、書記言語として対人性が問われない場合は常体で、対人性が問われる場合なら（一部は主節の文体とも関わることなく）敬体で用いられる方法に集中し、基本的には、規範的かつフォーマルな形式としての性質を強めていたということである。

ケレド節にはガ節とはやや異なった特徴が見られ、①主節が常体の場合のみならず、敬体でも書記資料では常体での使用傾向が強く、②ガ節に比べてノダ・ノデス類を書記資料でも音声資料でも高率で用いるという特徴を示す。ノを付加する用法には、受け手の受容に関連付ける意識を言語化する面があった。つまり現代資料におけるケレドは、規範性を整えようとする方向性とは別の、対人性をコントロールしようとする方略が顕著だったということである。

本稿では取り上げなかったが、ケレドには「けれども・けども・けれど・けど」といった形式のバリエーションがある。それぞれが、各種表現位相の中でそれぞれ使い分けられる[13]点でも、ガとは異なった“利点”を持つ。受け手との距離感を適切に、きめ細かに調整するだけの事情がそろっていたと言える。

こうしてガとケレドは、今日のそれぞれ方向性の異なる表現特性を帯びるに至ったものと理解する。

---

[13] 三枝（2007）、黒木（2010）、永田（2017）などにより、ガやケレドの諸形式「けれども・けども・けれど・けど」の用法差について、「改まり度」「丁寧度」「性差」などの観点から詳細に明らかにされている。

### 5.2. 逆接確定節で分担が起きる事由

なぜ、逆接確定節においてのみ、前節までに見たような、各種表現位相でガ・ケレドモの分担を生じる事態を生み出していたのであろうか。

これにはおそらく、逆接辞による節が持つ特質と関わっていると考える。逆接辞には各種用法があるが、いずれも基本的には順当な談話の流れに、何らかの意味で不連続・滞りを含んだ表現を持ち込むマーカーとしての機能が基本である。不連続や滞りは、発話態度・発話内容などさまざまなレベルで起こり得る。

(13) a 食べ物に反して男性の好みはうるさそう（？）。「欲張りかもしれませんが、ドラマの四人を足して、四で割った人が一番いいかも…」

(BCCWJ 新聞 PN2d_00008)

b 10 人以上という、なんか、食事の関係かなんか知りませんけれども、雇わなきゃいけないみたいで、その日。 (NUCC data035)

c「でも、瀬戸内のお生まれじゃないんですか。」「瀬戸内なんですけれど、やっぱり北海道の味ってのは、また違いますよね。」 (7a 再掲・NUCC data024)

(13a) のガ節では、表現者の、以下に続ける主節の内容に対する「欲張り」という評価を述べる。ガ節は受け手よって受容されづらい見解を述べる自覚に基づいて、注釈的に述べる[14]。(13b) は話者が伝えようとする内容に、話者自身が承知しない情報の欠落を含むことに不連続・滞りがあると認識している。(13c) は、相手にとっても既知の前提（瀬戸内の出身であること）からして、不連続性が感じられる見解（離れた地の味を慕わしく思うこと）を後件で続ける。(13ab) では主節が常体の表現文ながら、その滞りを含む情報提示による緊張をガ・ケレド節では敬体を取ることによって緩和しようとし、(13c) のケレド節では不連続性のある後件を続ける緊張を、ノを取ることによって相手の認識を確認・肯定しながら、敬体で承けることによって緩和している。

その緩和の方向性が、歴史的に先行し、近代では既に多用されていたガ節は受け手の受容と無関係な環境での使用か、あるいは受け手に対して直接的に丁寧さ、フォーマルさを表示することに向かった。対する後発のケレド節は、受け手の受容への関連付けの表現化によって、受け手配慮を表示する方向で多用されていた。それぞれの対人コミュニケーション上の方略の結果として、今日の住み分けのあり方へと至ったものと見る[15]。

---

[14] ガ・ケレド節によるいわゆる「前置き」の用法については、日本語記述文法研究会編 (2008:261) では「さっきの話だけど、もう 1 度考え直してくれないかな」などの例をあげ、「節の内容が主節の内容を言うための前置き」とし、「本題か否かという点で、やはり主節と対立している」と主節との対立（不連続性）に注目している。本稿は、自身の話題を以下持ち込む合図として、それまでの談話に対する不連続性に対するマークと捉えており、相違するところもあるが、不連続性を見出す点では同様である。

[15] なおこのことは、構文の側から言えば、ガ・ケレドは終止形に続くことで多彩な要素

## ６．おわりに

歴史的に先行するガの用法領域に、ケレドが次第に近づいていく中で、近代から現代という時代を経て、両形式に固有の共存のあり方に至った事情について検討した。逆接確定というある種の不連続・滞りを含む表現であることが、対人コミュニケーションの安定を図ろうとする歴史の中で、現代の諸資料では丁寧さやフォーマルさを求める方向（ガ）、あるいは受け手の受容への関連付けを言語化する方向（ケレド）において、それぞれ運用されている様子を確認した。

実際の運用のもとに各形式は存在し、それに基づいて文法の歴史が推移していく。本稿は、標準的な機能を検討の対象とするのみでは十分に行き届かない領域について光を当てる試みであった。その領域への注目により、日本語史の推移についての、より厚みのある把握に結び付けたいと考えている。

**【参考文献】**

金澤裕之（2015）「《資料・情報》「明治末・大正・昭和前期のＳＰレコード資料一覧―東京落語・大阪落語・演説講演分―」『日本語の研究』11-2

黒木晶子（2010）「従属節「～が」「～けれども／けれど／けど」を含む複文における丁寧形と普通形のあらわれ方―日本語母語話者による談話資料の場合―」『文教国文学』54

近藤明日子（2019）「『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料』（短単位データ 0.8）概説書」

三枝令子（2007）「話し言葉における「が」「けど」類の用法」『一橋大学留学生センター紀要』10

白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版

永田良太（2017）『接続助詞ケドの発話解釈過程と談話展開機能』溪水社

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法４モダリティ』くろしお出版

---

を承け得るＣ類（南 1974・1993 等）の従属節を構成するものであり、そもそも比較的自由に丁寧語やノダ類の着脱ができるものであったからこそ可能だったとも言える。Ｂ類での使用に止まる接続辞が多い仮定節の場合は、文体による使い分けには展開せず、前件と後件の生起関係を表し分ける方向で発達している（矢島 2013）。一方で、やはり終止・連体形を承ける順接確定節のカラ・ノデも、ガ・ケレドと同様に文体的な相違を示す。文に近いレベルの表現を取れることが、今日的な用法の共存と連なっていると見る。

日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 複文』くろしお出版
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
野田春美（2016）「「話しことば的」な文章に見られる話しことばとは異なる表現―BCCWJ におけるブログの特徴―」庵功雄他編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版
前川喜久雄（2006）「概説」報告書『日本語話し言葉コーパスの構築法』CSJ サイト所収
三尾砂（1942）『話言葉の文法（言葉遣編）』帝国教育会出版部（1995 年古田東朔解題による復刻版・くろしお出版で確認）
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
宮内佐夜香（2007）「江戸語・明治期東京語における接続助詞ケレド類の特徴と変化―ガと対比して―」『日本語の研究』3-4
宮内佐夜香（2012）「接続助詞とジャンル別文体的特徴の関連について―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として―」『国立国語研究所論集』3
森田良行（2007）『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
矢島正浩（2013）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院
矢島正浩（2017）「中央語におけるナラバ節の用法変化」有田節子編『日本語条件文の諸相―地理的変異と歴史的変化―』くろしお出版
矢島正浩（2018）「逆接確定辞を含む［接続詞］の歴史」藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』和泉書院
矢島正浩（2019）「なぜ落語資料なのか―序に代えて―」金澤裕之・矢島正浩編『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院

【付記】本研究は、JSPS 科研費 18K00610 の助成を受けたものである。

（やじま・まさひろ　本学教授）